

図 12

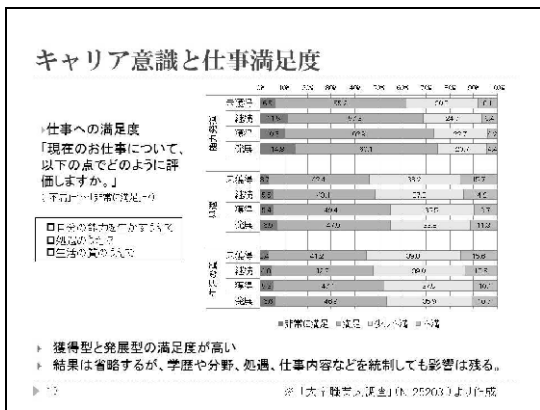


図 13

私どもが以前、大学生約5万人対象に行った「全国大学生調査」によると、大学入学時点で将来の方向性が確定していない学生がマジョリティでした(図10-11)。また、大学にやりたいことがあって入っても、大学教育で何のインパクトも受けなかった学生は、大学教育で得るものも少なければ、その後の職業生活もあまりうまくいっていないようです。やりたいことを見つけて、さらにそれを深める人や、やりたいことがなくても大学自体に何かを得た人の方が、獲得した能力や職業生活の満足度が高いという結果が出ています(図12-13)。高校が最後の段階だと思わずに、もう少し柔軟に、長い視点で考えてもらいたいと思っています。

論点⑤：新カリキュラムは、大学にどのような変化を求めるのか

論点⑤：新カリキュラムは、大学にどのような変化を求めるのか

- すでに高校段階で主体的な学習に力を入れている学校も増えているが(総合学科等)、大学側は意外とそうした動きを十分に把握していない。
- そうした高校の話や聞くと、大学へのスムーズな移行というより、「大学の初年次教育で同じようなことをまたやらされる」といった声もある。
- また、社会参加の学習など、現在、大学でも同様のことが課題となり、実践されている内容も多く、よい形で連携・協力することで効果が高められる可能性も感じた。
- もし、新カリキュラムが実現した場合、大学をはじめ、高等教育機関がどのように変わることでよりよい接続が生まれるのか、もしご意見や要望があれば、最後に教えていただきたい。

図 14

最後の論点は、新しいカリキュラムが実際に導入された場合に、大学側にどんな変化を期待するのかということです(図14)。今までの論点は、どちらかというとう大学の現場で問題になっていることでしたが、こちらはむしろ逆です。まず、大学側は、高校段階で行われている取り組みについて十分把握していません。私も東大の教員になって初めて、附属で卒業研究というユニークな学習が行われていることを知りました。そのため、「高校段階でそうした面白い教育をしていけば、大学教育とのギャップはあまり問題になりませんね」と高校の先生に聞くと、「初年次教育と同じようなことばかりさせられて迷惑です」と逆に怒られたりすることがあるのです。ですから、新たなカリキュラムが定着していったときには、入試だけでなく、大学教育がどう変わっていけばもっとうまく接続できるのかという提案が高校側から出されると非常に面白いと思います。

まとめ・閉会挨拶

大桃 敏行

(附属中等教育学校長・学校開発政策コース)

3年間の計画で研究課題を進めてきたカリキュラム・イノベーションは、今年が最終年度で、今日が最後のシンポジウムとなりました。最初のシンポジウムのときに、私は「今の学校教育は学問の言いなりになっている」というような言い方をしたかと思っています。

これは、まず各学問領域があって、それによって学校教育が規定されてしまっているということで、現実的に今もそうです。そうした中で、実際に多くの子どもたちが学ぶことの意味を見いだせなくなってきたというのが、教育の現状ではないでしょうか。

このカリキュラム・イノベーションの共同プロジェクトでは、「アカデミズムを起点としたカリキュラム編成から、社会的レリバンスを起点としたカリキュラム編成への転換をはかる」ことが研究理念の一つに掲げられており、今日はその最終成果の発表の場となります。具体的な提案としては、何か新しい教科をつくるということに近いものもありましたが、多くが既存の教科、あるいは総合的な学習の時間の枠内で行えるものだったと思います。もちろん、先ほどの質疑にあったように、学習指導要領が変わらないと教科を変えていけないという側面も確かにあるとは思いますが、今日の報告の多くが、今のままで少しずつ進めていけるものではないかと思います。

今回のイノベーション研究に関わる附属学校の取り組みをご紹介しますと、例えば1年生の総合的な学習の時間の一環の「東大探検」では、生徒たちが中野にある附属学校から1時間くらいかけて本郷のキャンパスまで来て、東京大学について調べ、中間発表会を何回かに分けて行います。一昨日、最後の発表会があり、前々校長の南風原研究科長にもご参加いただきました。テーマは多様で、例えば東大のキャンパスには銅像が多いので、この銅像は誰だろうか、この銅像の認知度はどのくらいかということ調べたところもあります。あるいは、東大の学生はどの県出身が多いか、生協以外の店が入ることによって生協はどのように変わったかなど、4人のグループでテーマを決めて調べていきます。東大の学生について調べる場合は、どのような学生を対象に、どのような形でアンケートを取るかという課題が生じますし、留学生について調べる場合は、どのように留学生を選ぶのかという課題が出てきます。南風原先生から、留学生をどのように選んだのか、どのような留学生にアンケートをするかでアンケートの結果が限られてくるというお話がありました。そうした中で、例えばアンケートの取り方、サンプルの選び方などを指導していく、アドバイスをしていくことになるかと思っています。

田中先生の報告に「教えることが探究活動としての学びへの支援である」という言葉がありました。まさに自分で学んでいくプロセスを支援していくということではないかと思います。例えば、東大の学生はこの県出身者が非常に多くてこの県は少ない、このことが示すのはどんなことなのか、その県の学校の制度が影響しているのか、あるいは所得が影響しているのかということを探っていくことによって、結果を導く思考が伸びていく。そのようなプロセスは、今日の報告にも非常につながるものと思います。

カリキュラムや学びの在り方を変えていくことは、21世紀を生きる子どもたちをどう育てていくのか、あるいは、どのような力を持つ将来の市民を育てていくのかということ、すなわち教育の目的にそのままつながっていると思います。各地方で、あるいは各学校でそうした実践を積み重ねていくことが、やはりカリキュラム・イノベーションの根本的な条件だと思います。私たちの出発点は、次の学習指導要領につながるような提案をすることでした。私たちの研究が次の学習指導要領の改訂に生きていけば、それはそれでうれしいのですが、上で変えて下に降ろすというトップダウン的な改革だけでなく、各地方、各学校で少しずつ変えていく、そして、それを相互に参照しながら新しいものが普及していく中で、新たなカリキュラム・イノベーションが進んでいくと思います。そのための一つのきっかけを私たちがお示しできていたらよかったです。

以上、感想といえますか、閉会挨拶とします。どうもありがとうございました。